

篠ノ之東のつがい

チェーンソーで戦うお坊さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東の対を名乗る男が現れて服従させてくる話。

下 上

|

|

目次

8

1

上

「くっ……この……おまええ……!」

「へえ……最初はあんなに嫌がってたのに、随分と大人しくなったね。
篠ノ之束」

「だれがあ……んあっ!」

腰を大きく突いてやると束は口を半開きにして声を出す。

「な、んでえ!」

逆らえない。

肉棒が束の膣壁を擦り、亀頭が子宮を押す度にどんどん抵抗する意思が奪われていく。

篠ノ之束は自他共に認める天災である。

未だに各国が解析仕切れないISを製作し、世界を混乱させる程の頭脳と世界最強と言われる織斑千冬と比肩する身体能力。

細胞レベルで規格外の超人。それが篠ノ之束だ。

その女が今、目の前の男に自分から屈服させられようとしている。

「あの天災、篠ノ之束が僕のペニスを入れてあんな喘いで感じてくれるなんて!!」

「……! だ、誰が! お前の粗チンなんて入ってるのかも分からない
いん——ひゃんっ!」

一際大きく腰が動くと、束の体が跳ねた。

「ははー、それはゴメンね? ならもつと感じてもらえるようにしなくちやね!」

言って、男の腕が束に伸び、その豊満なおっぱいを鷲掴みにする。

乳房をこねられたり、乳首を弄り回されると、それだけで頭が真っ白になりそうだった。

「お、ああ……なんでだよお……」

泣きそうな声で束は自らの疑問を口にした。

いきなり自分の前に現れてむりやり犯しているこの男。

排除するのは簡単な筈なのに、出来ない。感情が、細胞がその選択を拒否する。

今もこうして犯されていることに怒りを覚えるどころか、相手にもっと気持ち良くなつて欲しいとすら思つてしまう。

沸き上がる感情はとても不可解で気持ち悪い。

「な、何なんだよ!? なんなんだよおまえはあ!?!」

最早幼子のように泣きながら疑問を叫ぶ東に男はうん、と頭を撫でて答えた。

「僕は、きつと君の対となる存在。篠ノ之束の番つがいであり、カウンターとして生まれた存在だよ」

「何を、言つて……!」

「君は、疑問に思わなかったのかい? あまりにも恵まれ過ぎた自分の存在に」

天は二物を与えず、という言葉がある。

しかし、篠ノ之束はあらゆる物を生まれながらにして持っていた。

特に頭脳面はISという超技術を個人で開発できるほどに優れている。

世界すら相手に出来る性能を有した女。

「君の役目はきつと、人類の技術を発展させること。僕の役目は、あまりにも優れすぎている君が人類の敵にならないように制御する事、なんじゃないかなあ?」

「だが、そんな……っ?!」

「さあ? きつと神様とかじゃないかな?」

自分も束も、誰かに人工的に生み出されたのではなく、普通に生を受けた。

それでも男は、初めてメディアで束の存在を見たときに確信したのだ。

篠ノ之束は自分のモノだと。

「束とこうして繋がつてその確信は更に強まったよ! 君もそうだろうか?」

「気安く、よぶなあ!」

吐き出す言葉とは裏腹に、束は男を受け入れるように自分から腰を振り始めている。

男が気持ち良さそうに声を漏らすと、それだけで嬉しさと愛しさが込み上げてきた。

その気持ちを束は否定する。

「殺してやる！ お前なんかすぐにでも排除してやる！」

束の宣言に、男は面白そうに笑う。

すると、男のペニスが膨張し始めた。

「あ！ もう、射精る！」

「っ!? 抜け！ 抜けよお!？」

膣内射精を拒否したい筈なのに、体が拒絶しない。むしろ心待ちしていたかのように、より深く繋がろうとする。

「うっ!？」

ペニスから放たれた精液が束の膣内へと発射される。

「おえああああああああああっ!？」

今までに感じたことの無い程の強い絶頂に束は白眼を剥いて声をあげた。

全ての白濁液を流し終わると、男はチンポを引き抜き、呆けている束の顔に近づける。

「舐めて綺麗にして」

目の前にぶら下がったチンポ。

今すぐ切り落としてやりたいほど憎い筈のそれに、束は自分から口づけた。

「束、これで何回目だっけ？」

「うう……っ!？」

何度も膣内や口内。アナルに精液を注ぎ込まれ、身体にも何度も白濁液をかけられて、目は布で隠され、両手首も後ろに縛られている。

しかしそんな原始的な拘束など篠ノ之束には何の意味もない。無い筈なのに、こうして大人しく縛られているという不思議。

(こいつに犯されるたびに、どんどん抵抗できなくなつて、逆らえなくなる。なんで……っ！)

悔しさと情けなさで歯を食い縛る。

犯され、精液を与えられる度に細胞が、感情が、理性すらも溶かされて従順に作り替えられていく。

今もこうしてお腹に乗られて、物のように胸でペニスをシゴかされても沸き上がる感情は喜びだった。

気持ち良さそうな声が男の口から漏れる度に束も嬉しいと感じてしまう。

それが屈辱で、絶対にその感情に従つてなどやるものか、と歯を食い縛る。

それでも、時折見せる寂しそうな顔を見て、胸が痛む。その感情が偽物だと理解しながら。

「私は、ぜつたいにお前なんかの言いなりにならないんだよっ!!」

頬を叩いてやろうと腕を振るう。

しかし、その力は直前で躊躇われ、小さくペチンと滑稽な音が出るだけだった。

「シャ、ワー室にまで、入ってくるなよお!」

熱いお湯をかけられ、後背位から突かれている。

腰が前後に動く度に下を向いているその大きく実った乳房がプルプルと動く。

腰を動かす度に壁についている束の手がズレ落ちて、今は犬のように四つん這いの格好になっている。

尻を高く上げる束により体重をかける。

「う、あつ!? やめろって……! また、頭がおかしく……っ!?」
ドビュ、と膣内に白濁液を注がれる。

「く、う……」

悔しさに歯噛みするが、それ以上に包まれる幸福感に束は抵抗すら気力を既に失いかけていた。

「はあ……はあ……」

それから数日。男は束を襲ってこない。

束の対と名乗るだけあり、男の頭脳はかなりの物だった。

発想力では及ばない物の、その常識的感性から束とは別視点の意見を口にするところがある。

勝手に人のラボに住み込み、勝手に食事などの世話をしてくるだけ。

当初のケダモノっぷりが嘘のように大人しかった。

だから、教え込まれた快樂がなくなり、麻薬が切れたように性欲だけが大きくなる。

「なんでえ……!」

「なにが?」

気付いていて敢えて無視してくる。

苛立ちと焦り。

もうこの男にとって、自分は興味の無い存在なのではないかという不安。

「あんなに、襲ってきた癖に!」

「してほしいの?」

なら自分から求めろと挑発してくる。

近づいてくると何度も嗅いだ男の臭いが性欲を刺激してくる。

束の指が男のファスナーに触れた。

「体が疼いて、仕方ないんだよお……」

弱々しい声で自分からペニスを口に含んでくる。

涙目で奉仕する束の頭を男は何度も撫でた。

大きくなったペニスを確認するとMの字に脚を開いて陰口を指で開く。

「はやくう……もう、我慢できない……」

「僕を殺すって言ってた時に比べるとずいぶん大人しくなったね」

「うるさいな……お前なんてそのうち、ちゃんと消してやるんだからあ……っ!?!」

話の途中で挿入され、束が背を反らす。

「なら僕も、その前に束を完璧に落とさないとね!」

ジュポジュポと音が鳴って肉棒を出し入れする度に束が腰をくねらせ、男の首に手を回してしがみついてくる。

男も束の脚を掴んで子宮を打ち付け、乳房を揉む。

遠慮などなく、暴力的に貪られる事が痙攣するほどに快樂となっていた

「お、お、おおおおおっ!?!」

白眼を剥いて射精で流し込まれる精液を受け止める。

全てを射精し終えると、ペニスを引き抜く。

「あ……」

それを名残惜しそうに眺める束。

まだ物足りず、勃起したままのペニスを掴む。

「まだ大きなままじゃん。もつとしなよ!」

「人に物を頼む態度じゃないね。もつと下手に出て頼まないと、しばらくはまたしてあげない」

鼻で笑って告げるその勝利を確信した声。

躊躇っている束の頬をペニスで左右ぺちぺちと叩きいてくる。

当てられる肉棒の硬さや臭いに憔悴していた束のプライドが折れた。

「分かったよ……」

「ん？」

「これからはもう逆らわないし、口でも胸でもお尻でも使いたいときに私の体を好きに使っていいから！ だから、今は私をメチャクチャに犯してえー！」

言つて、ペニスを舐めてくる。

その言葉に男は笑みを吊り上げる。

「じゃあ、僕に乗ってスクワットみたいに上下して挿入して。出来る？」

「うん！ やるよー！」

寝そべった男に束は股がり、スクワットのポーズで上下運動を繰り返している。

「いっち、に……さん、し……！」

その滑稽な姿を眺めていると更にペニスが硬くなり、束の喘ぎ声が大きくなる。

「ねえ……なまえ、は……？」

ここで初めて束に名前を訊かれる。

「そういえば男も名乗ってなかったなと思ひ返す。

「ほどく解。 ほどく義野解だよ」

「うん！ ねえ、ほーくん。これから、君が気に入らない奴は全部消して上げるし、欲しいものは何でもあげるから……！ だから、束さんにこの快樂をずっとちよーだいっ！」

束の提案に解は苦笑した。

「もちろん。だって僕はその為に生まれてきたんだから」

言つて束の太腿を掴むと、大きく腰を突き上げる。

「つがい番に服従し、束は幸せそうな声をあげてヨダレをだらしなく垂らした。」

下

自らの対と名乗る義野解の存在を受け入れてから、篠ノ之東の日常は一変した。

「うほおお、お、お、おおっ!? こんな、朝からなんてえっ!? ほーくんの、ケダモノオツ!!」

文句を言いつつもその声は明らかに悦びの感情を内包している。

そんな束が填めている首輪のリードを引っ張る。

この首輪が解から束への初めてのプレゼントだったりする。

「そう言うわりにはマンコが僕のを啜えて放さないよね。動くの止めようかな?」

「ダメエエエツ!? 朝一番にほーくんの濃いザーメンをちよおだあいつ!」

脚をバタつかせながら放さないで解の腰に絡ませてくる束。

世界に天災とまで称された女が自分の前では一匹の牝になる。

その事実には解は興奮を覚えた。

「かわいいなあ、束は……」

「かわいい? えへへ……あんっ!」

かわいい、という言葉に喜ぶ束に解は子宮口をぐりぐりとペニスで強く押す。

それだけキュンキュンと膣内が締まっていき、解のペニスから精液を搾り取ろうとしてくる。

「うっ……!」

「きたああああああっ!! ほーぐんの熱い液いいいいっ!」

絶叫に等しい声を上げて束は解からの精液を受け入れる。

全てを吐き出し終えた後にペニスを抜くと、束がそれにしゃぶりついてきた。

「えへ……束さんとほーくんの味……」

幸せそうに、舌でペニスを付着した液体を舐め取っていった。

「ほーくん、あーくん」

「ああ……」

「おいしい?」

「美味しいね」

「……」

最近束が何処からか拾ってきたクロエという少女が作ったゲル状な朝食を平然と食べる二人。

朝食を平らげた後に食器を片付けようとするクロエを解が止める。

「洗い物は僕がやるからいいよ」

「しかし……」

「クーちゃんはこっちだよ。クーちゃん専用のISSの調整するからね」

そう言われてISSの置かれている部屋に引っ張られるクロエ。

「さて。さっさと済ませるか」

そう呟くと解は食器を洗い始めた。

「私とほーくん? クーちゃんを連れてきた二ヶ月くらい前に会ったばかりだし」

「そう、なのですか?」

意外な返答にクロエは首を傾げる。

てつきりもつと昔からの付き合いなのかと思ったていたが。

ISSの調整をしながら鼻唄を唄っている束。

「何故、東様は解様を離さないのですか？」

東に拾われる前から教えられていた篠ノ之束という人物像から男を傍に置くような人物には見えない。

勿論、クロエの想像であるが。

「すみません。出過ぎた質問でした」

クロエの疑問に考える素振りをする東に謝罪する。

「んくん。いいよー。自分でもちよつと意外だったからね！ でもそうだな。敢えて理由を口にするなら……」

東はクロエにニコつと笑う。

「運命、とか？」

その日、織斑千冬という名の女性は自宅のソファに座り、だらだらとテレビを見ていた。

仕事は休みで、数日ぶりに帰った自宅でくつろぐのに文句を言われる筋合いもない。

ニュースでは遠く離れた場所の人身事故の映像とそれを説明するニュースキャスターの声が流れている。

そのニュースに特に思う事もなく、流し見していると、不意に携帯が鳴る。

「……」

職場からだろうか？ と面倒そうに携帯を手にとると、画面にはそれ以上に面倒な相手の名前が映っていた。

篠ノ之束。

幼馴染から送られてきたのは1つの動画データだった。
果てしなく見たくない。

だが見ないと後々面倒な事になるのは経験則から判り切っていたので、嫌々にそのデータを開く。

「なっ!?!」

画面に出た映像を理解するのに数秒を有した。

『ちーちゃん、久しぶり〜。元気だったあ?』

映っていた束はいつものウサギの形をした機械のカチューシャを付けているが、服装はバニーガール。乳首や女性器の部分はボタンで留めて隠れるようになっていたが、今は外されて露わになっている。

豪華そうな部屋で大事なところを見せる体勢を取る束の後ろから男の腕が伸び、片方の胸を鷲掴みにする。

『アンツ……あ。ほーくん待ってえ……。まずはあ、ちーちゃんに報告しなきゃだからあ』

蕩けた表情と甘い声で身じろぎし、形だけの抵抗をする。

後ろに居る男が束の肩に顎を載せると、頬を手を添えて話す。

『この人はあ、ほーくん。義野解……束さんの運命の人なんだよお』

熱い吐息を漏らしながら身体を弄られるのを受け入れる。

後ろの男が乳首を指で擦られつつ、反対の手がクリトリス抓む。

長い髪を掻き分けて背中にキスをしていた。

それだけであの篠ノ之束がビクビクと身を震わせている。

『あ、やだ……そんなところ弄られたらあ……!』

顔を男の方に向けて撮られている事などお構いなしに舌を絡ませた熱烈なキスを始める。

クチャクチャと卑猥な音が幼馴染の上下の口から鳴る。

その生々しい映像と音に嗅覚まで刺激されるような気さえした。

口付けを楽しんだ後、膝立ちだった男が立ち上がると映っているペニスを束が屈んだ体勢でそれに触れる。

それに伴い、束の尻を撮影しているカメラも動き、ペニスが見える位置に移動する。

『あは……ビクビクしててかわいいーねー』

グロテスクなそれを束は躊躇う事なく口に含み、舌で奉仕し始めた。

慣れた様子で顔を前後に動かし、ペニスを唇と喉を往復する。

『ひほひい?』

『ああ。気持ちいいぞ。すぐに射精しそうだ』

男に頭を撫でられて嬉しそうに目を細める。

体勢を少し変えて、束の口はペニスの先端を離さず、自身の巨乳で竿の部分を包んでシゴく。

『ん……い。ほーくんのオチンチン熱いね。束さんのおっぱいが火傷しそうだよ』

自分の胸をぐにぐにと動かしてペニスを圧迫して刺激を与える。

男の方も腰を動かして束の頭を押さえて口の中を好きに犯していた。

しばらくして男が僅かに震えると、束の口から濁った白い液体が漏れる。

射精されて飲み込みきれなかったそれが溢れた。

『あ……もつたいない』

そう呟くと、束は足に落ちた精液をなんの躊躇もなく舐める。

犬のように男の足を指までペロペロ舐めていると、反対の足が束の頭をグリグリと踏みつけた。

『ダメだろ、溢しちゃ』

『うん。ちゃんと舐め取るよ』

足を退かすと浮いてある足の親指をチュパチュパと舐める。

丹念に両足を舐め終わると、束は自分のマンコを指で広げる。

『ほーくんのオチンチン、ちょーだい。束さん、もう我慢できないからあ』

広げたマンコから愛液が脚を伝って落ちる。

男が束が付けている首輪のリードを乱暴に引っ張った。

『四つん這いになって尻をこっちに向ける。動物らしく』

『うん!』

喜んで四つん這いになり尻を男に向ける。

期待感に満ちた吐息を漏らすと男は束の腰と自分のペニスを掴み、狙いを定める。

『え？ そっちのちが、ううううううっ!』

マンコではなくアナルにペニスを突っ込んだ。

『あ、あっ!?! 違うよおっ!! そっちじゃないっ!!』

『こっちの穴も好きだろ?』

『好きだけどお!? 束さんはオマンコ欲しかったのお!』

腰を打ち付けつつリードを後ろに引っ張られて苦しそうに一瞬だけ呻くが、感じているのは明らかだった。

男が束の肉付きの良い尻を平手で打つ。

『あうっ!?!』

『ワガママ言うなら抜いて終わりにしようか?』

『ダメエ!?! 欲しいっ!?! ほーくんのオチンチン欲しいのお!!』

世界から天災とまで呼ばれ、未だに各国が解明しきれてないISという道具を開発した女が1人の男に媚びへつらう姿を誰が信じるだろう。

男が四つん這いの束に覆い被さって体重をかける。

潰すように束の乳房を掴む。

同時に腸内へと射精を決めた。

『う、あぁっ!?! 熱いの、流れてえっ!?!』

嫌がっていたアナルセックスも精液流し込まれて緩みきった表情を見せる。

『……知ってる? 兎って繁殖力高いから、オスとメスを一緒に部屋に入れて放置したら1年くらいで百匹くらい増えるんだって』

どうしてそんな話をするのか。

疑問を口にする前に男が話を進めた。

『束は僕との子供が欲しい?』

不安だったのか、束を試しての問いなのか。

判らなかつたが答えは決まっている。

『うん! 欲しいっ! ほーくんの赤ちゃん、何人でも産むから! オチンチンを束さんの子供部屋に入れてえ!!』

『……良い子だ』

アナルからペニスを抜き、マンコに挿入し直す。

『これええええええええええっ?! 頭バカになるうううっ?!』

獣のように叫んで篠ノ之束は快樂を受け入れる。

パンパンと肉を打ち付ける音が鳴り、身じろぎする度に束の嬌声が画面越しから響く。

男が束の上半身を起こしてから脚から持ち上げ、2人が繋がっている性器が丸見えの体勢なる。

『ひゃっ?! あ、あ、あつ、あああああいつ?! くるう?! ほーくんの種が束さんの子宮にいいいつ?!』

その言葉が真実であるかのように、繋がって性器。束のマンコからは受け止め切れなかった精液が溢れて床に落ちていた。

『はあ……はあ……』

Mの字開脚の体勢で支えられた束がどう見ても正気じゃない表情でダブルピースをする。

『えへへ……ちーちゃん。束さんね。うんめーの男性ひとを見つけたよお……ちーちゃんもいーひと見つけてね……』

そこでプツリと動画が途切れる。

「……」

眉間を何度か揉んだ後に、千冬は手にしている携帯をソファアの上
に思いつき叩きつけた。